



Title	進化するロック専門誌『通俗歌曲』：中国にロックを紹介した刊行物
Author(s)	青野, 繁治
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー. 2012, 2012-02, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2012-2

**進化するロック専門誌『通俗歌曲』：
中国にロックを紹介した刊行物**

**进化着的摇滚乐专刊《通俗歌曲》：
为中国介绍摇滚乐的刊物**

青野 繁治

進化するロック専門誌『通俗歌曲』：
中国にロックを紹介した刊行物（日本語版）*

进化着的摇滚乐专刊《通俗歌曲》：
为中国介绍摇滚乐的刊物（中文版）

2012年11月20日

青野 繁治†

* 本論文は、2011年にすでに大阪大学中国文化フォーラムのディスカッションペーパー（No.2011-10）として発表していたものだが、2012年に台湾東華大学における「第六回現代中国與東亞新格局」国際学術研究会で、中国語版を発表したのに合わせ、旧稿にあった一部の誤りを修正し、「むすび」を加筆したものである。後半に中国語版の全文を収録し、合わせて一本のペーパーとすることとした。なお、日本語版と中国語版はほとんど同じであるが、表現や内容に若干の相違がある。また日本語版の末尾につけていた「文献・資料」は、中国語版と同じであるので削除し、中国語版末尾に統一した。

† 大阪大学大学院言語文化研究科教授
562-8558 箕面市粟生間谷東 8-1-1 大阪大学箕面キャンパス
s_aono@lang.osaka-u.ac.jp

はじめに

中国にロック音楽を紹介するのに、香港・台湾ポップスおよびその業界が大きな影響をもったことはよく知られているが、日本のミュージシャン（さだまさし、アリス、ゴダイゴ）が直接にライブ活動を行なうことによって、重要な役割を果たしたこともまたよく知られた事実であり、花蓮会議においては、このあたりの事情を述べた[青野 2009]。80年代の改革開放政策によって、中国への留学生を通じて、カセットテープや楽譜や楽器が中国にもたらされた事情についてもすでに文章を書いたことがあるが[青野 2006]、それはいわば直接的な音楽活動による交流であった。

それらは強烈なインパクトを中国の若い世代に与え、崔健を代表とする後のロックシーンのリーダーたちを育てて行ったのであるが、こうして成長していった中国のロック音楽を大衆的なレベルで認知させたのは、政府機関によってコントロールされるテレビなどのマスメディアではなく、ライブステージを提供するバーやライブハウスのような、ミュージシャンやファンたちによって次第に作られていったコミュニティの場とそれを90年代後半以降、広い仮想空間で展開するのを可能にしたインターネットであった。

後者の果たした役割については別に論を立てなければならないが、それを除けば、前者のようなコミュニティで情報を伝達する手段として機能していたのは、DJ 有待が90年代に西洋のロックを紹介することを目的として行っていたラジオの音楽番組といくつかの民間雑誌だったと思われる。DJ 有待については、すでに『大陸ロック漂流記』に紹介があり、90年代当時の中国の若者に大きな影響力をもっていたことが紹介されている[ファンキー末吉 1998]。ただ、実際に音源が残っているわけでもなく、どのような内容で、どれくらいのバンドや曲が紹介されたのか、その全体像は今ひとつ明らかではない。

それに対して、印刷物として発行されたものは、それが目に入る形で残されている限り、中国にロックがどのように紹介されたかを知る上で重要な資料となる。

そのほかに、いわゆる「打口帯」(ダーコーダイ=穴をあけた廃棄用のカセット)のように、西洋ロックのレコードやカセットテープ、CDがどのように中国に輸入されたかを調べることができれば、それも重要な資料となるだろう。またミュージシャンや音楽家の回想録、テレビ番組のインタビューなども重要な情報となる。ロックについて言えば、2004年にCCTV中国中央電視台が放映した番組「記憶」の一シリーズ「中国音楽的N個時間」は、作家でありシンガーソングライターでもある劉索拉を中心に、80年代の中央音楽学院がロックや電子音楽にも強い関心を示したことを語る重要な映像資料である。書籍資料もすでに多く出版されている[雪季 1993、橋爪大三郎 1994、汪継芳 1999、于今 1999、顔峻 2001、2002、2004、陸凌濤・李洋 2003、朱大可・張闕 2005]。

今回は、それらすべてを調査する余裕はない。そこでいくつか限定的な雑誌メディアについて、若干の調査を行なった。音楽情報を中国の人々に伝える役割を果たしたと思われるメディアには、『中国電視報』『北京電視週刊』などのテレビ番組情報誌紙があり、また対象は中国人ではなく中国在住の日本人や外国人であるが、『Super City 北京』『TOCOTOCO』などフリーの日本語版中国情報誌、『that's BEIJING』のような英語版中国情報誌があり、さらに中国人向けのロックないしポップスの専門誌としての『通俗歌曲』『摩登天空』『[V]magazine』『我愛搖滾樂』などがある。

この中で比較的初歩的にはあるが調査できたのは、『通俗歌曲』『摩登天空』および『我愛搖滾樂』の三誌である。本稿では『通俗歌曲』をとりあげ、その果たした役割を歴史的に考察する。

・進化するロック専門誌 『通俗歌曲』ヒストリー

『通俗歌曲』は、おそらく最も早くロックの情報を中国で紹介したメディアの一つである。

『通俗歌曲』は、日本の国会図書館に当たる中国国家図書館には所蔵されていない。私が所蔵を確認できたのは、北京首都図書館であった。最新の号は開架の雑誌のコーナーで閲覧できるが、バックナンバーは書庫にあるため、コンピュータで所蔵を確認し、号数を指定して、請求しなければならない。コンピュータ検索では、この雑誌も全巻は揃っておらず、90年頃から合本にしたものが存在していた。そこで90年代のものを全て請求して、閲覧し、いくつか確認できたことがある。

90年代に発行されていた月刊誌『通俗歌曲』は、小型判の冊子で、雑誌という体を成しているとは言いがたいものだった。それは日本で言えば、往年の『明星』などに付録としてついていた歌詞集、楽譜集のような体裁の小冊子だった。記事らしきものは少なく、誌面のほとんどを楽譜が占めており、しかもその楽譜は五線譜ではなく、また所謂日本のギター雑誌のような6線のタブ譜でもなく、中国の京劇の伴奏などを表記するのに用いられる「簡譜」と呼ばれる数字譜であった。

掲載されている曲目は、中国の民謡や歌謡曲が主体であったが、時代が下るに従って、香港・台湾のポップス、歌謡曲が増えて行き、中国のロックまた欧米のフォークソング、ロックの楽譜も掲載されるようになっていった。

1990年代末になって、『通俗歌曲』は転機を迎えた。ロックの専門誌に変貌を遂げたのである。誌面もB5版の普通の雑誌並みの大きさに、写真などもちゃんとしたグラビア印刷になり、紙質も向上した。それ以来、表紙に「中国搖滾第一刊」というキャッチフレーズを掲げて現在に至っている。新生『通俗歌曲』がそれまでと大きく変わった点は、欧米や中国のロックバンドに関する情報、ロックフェスティバルやライブの情報が記事の中心となったことである。またバンドメンバーの写真も多く掲載され、ロック情報誌としての性格を強めたと言えよう。また人気バンドのヒット曲の歌詞が掲載されたり、ロックの名盤や新盤のディスコグラフィが掲載されることで、ロックに関心をもち、これからバンド活動を始めようと考えている若者には、よい参考書になったものと思われる。

ただ理由は明らかでないが、それまで主をなしていた楽譜は、姿を消し、アーティスト情報記事に場所を譲った。著作権等の問題もあるのだろうが、むしろ書店の音楽コーナーにならぶ楽譜の専門書にポップス、ロックが登場するようになって、そちらに役割を譲ったものと思われる。

『通俗歌曲』という誌名を維持したのは、まだ「搖滾」という言葉が公安の取り締まりの対象と成りうる事を慮ったのであろう。中国初のロック音楽の学校「迷笛現代音楽学校」が「現代音楽」という言葉を用いているのも、同じ理由であったということである〔香取義人：1999〕

1999年以降の表紙を比べてみると、この雑誌の微妙な進化の過程を読み取ることができる。1999年までは、表紙のタイトルは、ただ『通俗歌曲』と記されているだけであった。それでも1999年前後になれば、内容的にはロックに関する記事が大半を占めた。表紙を飾るアーティストの写真

も全て、ロックのアーティストであった。タイトルに「揺滾」も「ROCK」も言葉としては使われていない。11月号にDef Leppardの特集が生まれ、「揺滾特刊」の文字が見えるのが唯一の例外である。おそらくこのころから「ロック」に対する公安の規制や警戒が緩んできたのではないかとと思われる。この「揺滾特刊」を機に、2000年からサブタイトルとして、「中国揺滾第一刊」がつくようになり、またタイトルの「通俗歌曲」のうしろにさりげなく「ROCK」の文字がつくようになるのも、同じころである。こうして少しずつ雑誌は「ロック」色を前面に押し出し始める。

しかし、その方向性にも紆余曲折があったろうことは、2001年から2002年にかけての表紙タイトルから見てとれる。たとえば2001年の6月号から9月号にかけて、タイトルには「通俗歌曲」「ROCK」「中国揺滾第一刊」のほかに、「揺滾版」の文字が加わり、10月号では、「揺滾版」の代わりに大きく「ROCK」の文字が加わっているのに対し、11月号では、「通俗歌曲」のタイトルが小さく右下に退き、「ROCK」「中国揺滾第一刊」が消えて、上部に「ROCK POP」の文字が、あたかも雑誌のタイトルのようにふるまっている。12月号では、それが9月号以前に戻るのだが、年が明けて2002年1月号は、「通俗歌曲」が画面上部に位置するものの、「ROCK」「中国揺滾第一刊」は消えており、「通俗歌曲」のタイトルよりも大きな「POP」の文字が自己主張している。2月号からは、その「POP」が「ROCK」に変更され、後ろに「ROCK」のついていない「通俗歌曲」のタイトルの下に「中国揺滾第一刊」が復活し、このパターンが2004年ころまで継承される。

ここには、雑誌でどのような音楽を取り上げるか、をめぐって、あるいは「ロックとは何か」と言ったような、流行音楽の定義をめぐって、編集部で議論と対立があったであろうこと、結果としていわゆる「POPS」も包含する形で「ROCK」に一本化して行ったという流れが読み取れるのではないだろうか。

しかし、それは矛盾あるいは対立の止揚ではなかった。2004年の途中から、「ROCK」が漢字化され、タイトルに昇格する。つまり誌名が『揺滾』となり、副題として、「通俗歌曲」「中国揺滾第一刊」がつくようになったのである。それはつまり「ロック」が市民権を得たことを広く宣言するものであったと考えられる。ただ商標登録の問題もあったろうし、雑誌としての継続性も担保しなければならなかったであろう。「通俗歌曲」の名が、表紙から消えることはなかった。この誌名変更は読者に混乱を生じ、読者の混乱に合わせるように、また『通俗歌曲』のタイトルが大きくなる、というような一こまもあった。

更に「通俗歌曲」は半月刊となり、月に二回発行されるようになった。そのことは、需要と供給の原理から「ロック」の人気の高さを表していると考えられるが、それはまたロックファンの増加とともに、ロックファンの嗜好の多様化も意味していた。

つまり、「通俗歌曲」は、通常の「揺滾」バージョンを月一度刊行しつつ、二週間あけて、「非音楽」(Not Only Music)「吉他」(ギター)「貝司」(ベース)「鼓」(ドラムス)鍵盤(キーボード)というように、「ロックからはずれる」音楽や、ロックの楽器毎の特集が非定期的に企画され、「非音楽」などは次第に定期化していく、というような現象が生じた。

日本で『ヒットポップス』や『ニューミュージックマガジン』といった総合誌から、『ギターマガジン』『キーボードマガジン』などへと展開していったのと同じような現象であり、そこには、楽器を始めた若者たちの楽器演奏法に対する関心が楽器ごとに異なってきたことと、そういう楽器購入者予備軍に対して、エレキギター、シンセサイザーなどのメーカーや外国製楽器の輸入業

者、音楽学校が存在して、雑誌出版のスポンサーとなっていた、という状況も指摘できるだろう。着実にロック音楽が産業構造の一角に組み込まれていく姿がそこから見て取れる。

『通俗歌曲』の果たした役割——1990年代

さて、『通俗歌曲』は、どのようにロックを紹介して行ったのだろうか。

90年代初期の『通俗歌曲』は、所謂歌謡曲を紹介するのが主であった。それも流行の歌謡曲であった。中国大陸でも中高生に人気の高い台湾の作家三毛は、中国西部の民謡作曲家王絡賓のファンで交流があったこともあって、1991年1月に自殺したことが報じられると、同年6月の号で「三毛專欄」と言う特集が組まれ、彼女の作詞になる「我愛橄欖樹」「滾滾紅塵」「飛」の楽譜を掲載したのは、やはり話題性に影響されている雑誌の一側面を表している。

1992年5月号にロックではないが、日本でも「イエローチルドレン」のタイトルで発売された朱哲琴（ダダワ）の「黄孩子」が“新專輯”（ニューアルバム）として紹介されている。「音楽茶座」という連載コラムの記事として取り上げられたのである。上海音楽学院の教授でもある作曲家何訓田・何訓友兄弟のプロデュースによるこのアルバムは出色の出来で、朱哲琴は「中国のエンヤ」とまで言われるが、これより後、朱哲琴の音楽は民族色それもチベット色を帯びてくる。チベット文化は王勇、鄭鈞など多くの中国のミュージシャンに大きなイマジネーションを提供したと思われるが、彼女もその一例である。ポップなヒットを狙うのではなく、芸術的表現を重んずる彼女のアルバムが紹介されていることは、このコラムの担当者の炯眼を示していると言ってよい。

1992年11月号に、人気ロックバンド黒豹（ヘイバオ）の「無地自容」の楽譜が掲載されたのもタイムリーなことであったと思われる。丁度、黒豹のファーストアルバムが発売されたのち、音楽性の相違からヴォーカルの竇唯が脱退し、キーボードの峦樹がヴォーカルを兼ねるようになった時期で、同時期に発売された中国ロックのアンソロジー「摇滚北京」のカセット版には、峦樹のバージョンで、「脸谱」という曲が収められて、ヒットしたのである。（言うまでもないが、ファーストアルバムに収められている「脸谱」の声はもちろん竇唯である。）

1993年4月、その「音楽茶座」のコラムに「飛・從“唐朝”看中国摇滚」という記事が掲載された。前年の黒豹に続いて、中国の二大人気ロックバンドの登場である。黒豹は楽譜だけだったが、唐朝の場合は、実力派バンドの紹介記事を通じて、中国ロックの成長ぶりが謳歌されている。楽譜は台湾の魔岩文化レーベル（滾石唱片）から発売された「唐朝」と題されるファーストアルバムから「夢回唐朝」と「太陽」の二曲が選ばれている。ちなみに同じ号には、崔健らとバンド活動をしていた初期の中国ロッカー陳勁の代表曲「紅頭繩」の楽譜も掲載されている。

人気が急上昇を遂げつつあった中国ロックの一端がここに反映されていると考えていいだろう。

この号は更にもう一編重要な記事を載せている。達信が書いた連載記事「火紅的年代—60年代英美流行歌壇史話」の第4回で、紹介されていたのは、「披頭士」すなわちビートルズである。もちろんビートルズの中国への紹介は実際にはもっと早い。たとえば先に触れた劉索拉は1986年に上海文学に発表した「藍天綠海」という小説の冒頭に、Let It Beの歌詞の一節をエピグラムとして用い、Beatlesの名も提示されていた。しかしそれは紹介というよりもむしろある種の崇拜であり、オマージュであった。客観的な紹介としてはこの『通俗歌曲』を待たなければならない（香

港の情報誌における紹介はもっと早い、中国返還前の香港からの中国国内への影響は限定的であったと思われる。)。ちなみに、「通俗歌曲」におけるビートルズの楽譜紹介は、1995年2月号であり、その曲目は「Yesterday」であった。

さて、1993年になると、6月号に張楚の「姐姐」とADOの「我不能隨便說」の楽譜が掲載された。これは魔岩文化レーベルから出た中国ロックのアンソロジー「中国火」の一曲目と二曲目に他ならず、ここから推測できることは、魔岩文化レーベルがレコードのプロモーションのために、この二曲の掲載をもちかけたのではないかと、ということである。中国の音楽業界の形成には、台湾の業界も大きく関わっているのであるが、それがこのような形で表れているのだろう。

それ以後は、1994年10月号に、鄭鈞の「回到拉薩」「赤裸裸」「極樂世界」が、1995年2月号に、丁薇の「断翅的蝴蝶」、そしてビートルズの「Yesterday」の楽譜が掲載された。1995年9月号には、ロックの楽譜の掲載はないが、「歌迷天地」のコラムで、折しも交通事故死した唐朝のベーシスト張炬をとりあげており、また前年「断翅的蝴蝶」でデビューした丁薇を紹介する記事が載っている。しかし、ジャズ色の強いボーカルを聞かせ、大いに期待されたが結局このアルバムは不発に終わった。丁薇がブレイクするのは、それから3年を経て発表された「開始」というセカンドアルバムであった。

更に1996年2月号には、「揺滾一族、揺滾 Party、再熱京城」という北京のロック事情を紹介する記事が載り、臧天朔の大ヒット曲「朋友」の楽譜が掲載された。1996年3月号には、竇唯のソロアルバムから「艷陽天」の楽譜が、4月号には、ロッククイーン羅琦の片目を失明した事件とその後を扱った「羅琦・失眠的滋味」と元黒豹のキーボード奏者でヴォーカリストでもあった峦樹が、所謂セカンドアルバム『黒豹』を録音した直後にバンドを脱退したことにより、日本版『黒豹』には、『黒豹』のメンバー、つまりヴォーカルに秦勇が、キーボードに馮小波がクレジットされ、実際の録音にかかわった峦樹のクレジットがないことを理由にJVCを提訴した記事「黒豹前主唱峦樹状告JVC」が掲載されている。

北京首都図書館で確認できた90年代の『通俗歌曲』のロック記事、楽譜の状況は大体以上のようなもので、記事にしる、楽譜紹介にしる、それほど多いとはいえない。雑誌そのもののメインはやはり、歌謡曲であった。しかし黒豹、唐朝など中国ロックにおける重要なアルバムの発売や有名な事件については、比較的妥当な取り上げ方をしていたことがわかる。ただ外国のロック音楽については、まだ詳細な紹介を行なうには至っていない。

90年代末から『通俗歌曲』がロックの専門誌に姿を変えた理由を分析するには、90年代以前と以後でどのような読者層の変化があったのかなど、他に考察しなければならない問題も多く存在しているが、それは今後の調査に譲るとして、とまあ90年代の『通俗歌曲』によるロック紹介の活動は、同時代における中国のロック音楽業界の動きと連動していたのであり、その受容に対応していくためには、「ロック」の専門誌に生まれ変わる必要があったのであろう、ということがおおむね理解できた。

・ロック専門誌としての『通俗歌曲』——1990年代末から2000年代

1999年に雑誌の表紙を飾ったのは多く中国のミュージシャン（陳底里など）であったが、海外のバンドを紹介する記事も掲載されていた（たとえばYESやDEF LEPPARDなど）。しかし2000

年になると、俄かに西洋人ミュージシャンを表紙に起用する号が目立つようになる。7月号表紙のMADONNAが著名どころだが、記事に関しては、5月号にMOBY、Björk、LIMP BIZKIT、6月号にKURT COBAN、SMASHING PUMPKINS、EVERYTHING BUT THE GIRL、7月号にMETALLICA、KID ROCK、KORN、9月号にDIAMANDA GALÁS、11月号にSKID ROW、PANTERAのPHIL ANSELMO、LIMP BIZKITのFRED DURST、12月号にEMINEMの記事がある。2000年になって、西洋のミュージシャンやバンドの記事が急増している様子が見て取れる。この段階になると、1980年代半ばまでで西洋のロックやポップスを聴かなくなった筆者には、全くチンプンカンプンと言っても過言ではない。

2000年の反動であろうか、2001年になると、表紙は中国のミュージシャンが多くなる。例えば、1月号は崔健で、「解剖崔健」という特集記事が組まれている。また5月号が痛苦的信仰、6月号が姜昕、12月号が左小詠呪という具合である。それでも、1月号には、RADIO HEAD、COLD PLAYの記事が見え、西洋から中国にシフトした、というわけでもない。2月号の表紙は西洋人女性だが、唐朝、黒豹、許巍といった中国ロックの大御所バンド、大御所ミュージシャンの記事が掲載され、南寧のアンダーグラウンド音楽シーンについての記事も見える。西洋ロックとしては、LED ZEPPELINの記事があり、西洋ロックでも大御所が紹介された号である、と言っていいだろう。5月号の特集は「RAP & METAL」(ラップとメタル)、6月号が「WOMAN ROCK」(女性ロック)、8月号が「打口歲月」(海賊版の年月)、12月号が「酒吧文化」(バー文化)という具合に、中国ロックの歴史を知る上でポイントをついた特集が組まれているように思う。

つまり、専門誌になって以来、ずっと西洋と中国の新しいロックのトレンドを追い続けてきたこの雑誌は、2001年に入って、一旦たちどまり、中国ロックの90年代、および西洋ロックの60年代70年代そして80年代を振り返り、系統的に紹介し、認知し、評価していく作業を必要としたのではないだろうか。そこに漸く芽生えた専門誌としての自覚を読み取ることができるが、それと同時に人気の出てきた中国のミュージシャンや次々にデビューする新人ミュージシャンを紹介し、育てていく、そういった役割への自覚も読み取ることが出来る。

こうして2002年になると、表紙を飾るのは話題のミュージシャンが多くなっていく。3月号の鄭鈞、4月号の張楚、5月号の朴樹、6月号の丁薇、9月号の朱哲琴とメジャーなミュージシャンが並ぶなか、8月号の舌頭は、パンク系のロックとしては珍しく表紙となった。12月号の表紙がJOHN LENNONであるのが、この年としては異色だが、もうひとつ異色のこととして注目されるのが、7月号および10月号の表紙である。

7月号の表紙に取り上げられたのは、2002年度の「迷笛現代音楽節」の写真である。「迷笛現代音楽節」とは、中国のロック専門学校の草分け「迷笛現代音楽学校」が1999年より毎年開催しているロック音楽のフェスティバルである。このイベントは2003年までこの学校の校庭に舞台を設置して行なわれており、学校の卒業演奏会的位置づけであったと思われるが、次第に卒業生以外のミュージシャンをゲストとして呼んだり、海外のミュージシャンを呼んだり規模が大きくなり、2004年には、国際彫塑公園を会場に国慶節の10月1日から4日まで四日間にわたって開催される大イベントに成長して行く。

また10月号の表紙にとりあげられたのは、「麗江雪山音楽節」の写真で、これはこの年が第1回目の開催であるが、崔健、唐朝、朱哲琴をはじめ、中国ロック界のパイオニア的ミュージシ

ンが多く参加したことで話題になった。

こういう記事を目にすると、筆者は自らの高校生時代に毎月講読していた「GUTS」という雑誌に、映画になって日本でも上映されたアメリカの伝説的ロックフェスティバル「ウッドストック」の特集記事が何号にもわたって掲載されていたことを思い出す。当時、日本のミュージシャンは、クロスビー・スティルス&ナッシュやリッチー・ヘブンスが演奏に使っていたギターのオープンDチューニング奏法を必死で研究していた。

おそらく中国の若者たちにとっては、これらのフェスティバルは、「ウッドストック」フェスの中国版だったのだろう。周囲を公安に囲まれての音楽祭であるから、中国の若者はウッドストックのようにハメをはずしたりはしなかったのだが。しかし、このようにして人が多く集まりエネルギーの発散されるイベントが、中国、それも天安門事件を2度経験した中国で、禁止されることもなく、毎年のように開催され、またその記事がウェブページや雑誌に掲載され、報道されるということは、ある意味驚異的なことだと思われる。

ちなみに『通俗歌曲』がロックフェスティバルを取り上げるようになったのも偶然ではない。この頃から、行政や企業はフェスティバルの経済効果に気づき始めたのである。2002年の「麗江雪山音楽節」は、まさにそのことを表す象徴的なイベントであった。主催単位が麗江の旅行会社であり、それにネット会社や音楽関連企業、テレビメディアなどが協賛の形で開催を支援したのである。もちろん聴衆の多くは、中国全土からやってきたロックファンの若者たちだった。

また上海市政府は、観光都市上海の宣伝のために、「上海旅遊節」というイベントを行なっているが、2003年の同イベントでは、南京路歩行街の一角を臨時の塀で仕切って、会場を設営し、深夜におよぶロックコンサートを行ない、100元の入場券は瞬く間に売り切れた(当時のロックバンドのチャージは、20元から50元(日本円で260円から650円)程度だったので、メジャーなバンドが多く出演していたわけではないとしても、安いチケット設定だったと思われる。崔健の単独ライブですら、この頃から100元を超えるチャージをとっていたことからそれは確認できる)。その日コンサートに登場したミュージシャンは地元上海のバンドが中心だったが、コンサートの最後のトリに招かれたのは、中国のロックキング崔健だった。

ファンキー末吉『大陸ロック漂流記』にあるように、ロックを警戒し、いろいろな場面で妨害をしかけていた中国の政府機関が、ここでは街の経済活動を盛り上げるために、ロックを利用するまでになったのである。

・『通俗歌曲』の価格と流通形態

北京首都図書館で閲覧した90年代の『通俗歌曲』がどれくらいの価格だったのかは、迂闊なことに、確認できていない。しかし後の号に掲載されていたバックナンバーの広告によれば、95年は合訂本が上・下冊おのおの16元、96年の合訂本は上・下冊おのおの22元、97年の合訂本上・下が各31元、98年の合訂本が上・下各25元とされ、実売はそのほぼ半額であることが書かれている。1999年、2000年は毎号6.60元、2001年は毎号7.80元に値上がりし、2002年9月には、一気に毎号13.80元に急騰する。

急騰の理由は、ロックの認知と人気の上昇があったばかりではない。実はこの頃から雑誌にCDが付録として付けられるようになったのだ。誌面に紹介されるミュージシャンやバンドが写真や

記事だけでなく、サウンドとしても聞けるようになった。これが定番化していくのだが、そうなってくると、付録 CD に取り上げられることが、新人歌手、新人バンドにとっては、有名になるきっかけともなっていくし、海外のバンドやミュージシャンも知名度を高め、CD の売り上げや中国でのライブコンサートの客の入りにも影響してくることになる。

こうして、付録 CD は現在まで続く定番アイテムとなった。

ところで、この『通俗歌曲』を入手するには、どうすればいいのだろうか。例えば北京に住んでいる人であれば、街に出て行けば、大抵のところ「書報亭」と呼ばれる刊行物を販売する簡易店舗がある。民間の商業紙誌、娯楽系詩誌は大抵ここに売られている。発売日以降にここへ行けば店頭に出ている。店舗によっては、売れ残ったバックナンバーを安売りしているところもある。一冊でも入手すれば、出版元の連絡先がわかるので、定期購読を申し込むこともできる。

むすび

『通俗歌曲』は、もともと民間の流行歌を紹介するのが目的の定期刊行物であった。しかしロックの情報を求める読者の増加に対応して、次第に刊行物の方向性を変えていき、1999 年にはロックの専門誌となり、より多くの情報を読者に提供していった。その後さらに読者層の変化や世相の変化に伴って、ジャンルや楽器ごとの刊行物へと進化して行った。このような進化は、中国に無数の潜在的ロックファンが存在して、その提供する情報を吸収し、将来自らもロックスターを夢見る、というような状況を反映しているであろう。それがこの刊行物の意義であったと考えられる。

バックナンバーの収集がいまだ不十分であり、発行部数や読者の地域分布など、まだ調査が充分できていない点も多いが、おいおい調査を進めて行きたい。更に、『我愛搖滾樂』『摩登天空』その他の刊行物の考察を今後の課題とする。

2010.10.10 初稿

2011.3.4 改稿

2012.11.14 一部加筆修正

序

众所周知，把欧美的摇滚乐介绍到中国的时候，港台流行歌曲及其音乐产业所起到的作用是很大的。日本的音乐人（比方说，佐田雅治、亚丽斯、后醍醐等）通过现场演出起到的作用之大，也是大家公认的事实。关于这些事情，我已经在台湾花莲召开的研讨会上做过报告。随着改革开放的进展，很多外国留学生来到中国，还带来了各种各样的音乐磁带、CD、乐谱、乐器等。这些情况，我也写文章介绍过。上述的情况，都可以说是直接的音乐交流活动。

这种活动向中国的年轻一代给予强烈的刺激，至于培养了以崔建为代表的中国摇滚乐先进分子。把这些中国摇滚乐的新动向介绍给中国群众的，不是被政府机关所控制的电视等巨大媒介，而是供于现场演出的酒吧和歌厅，并且在这里逐渐地形成了音乐人和听众的交流空间。然后音乐人和乐队的信息是在 90 年代后半通过互联网传播出去的。

关于互联网在这个方面起到的作用，另要考证。除了网络以外，在这种交流空间中，传播信息的媒体要举在 90 年代由 DJ 有待经营的介绍欧美摇滚乐的广播节目和几部民间音乐刊物。关于 DJ 有待已经有凡奇末吉《中国大陆摇滚乐流浪记（大陸ロック漂流記）》的详细介绍，看得出他对 90 年代年轻人有一定的影响。不过，查不到其录音和记录的情况下，介绍过多少乐队和乐曲至今还未清楚。

反之，打印出版的刊物，只要保存下来，就会提供重要的信息，告诉我们摇滚乐是怎样介绍给中国的。

另外，还会有所谓“打口带”和唱片、CD 等怎样进口到中国的情况，要是能够查出来，那也是一种很重要的资料。音乐人的回忆和电视等节目的采访，也是很优良的信息。关于摇滚乐，中央电视台 2004 年播放的《记忆》节目的一个系列《中国音乐的 N 个时间》，以作家兼创作歌手的刘索拉和评论家黄燎原为策划人，回顾了他们 80 年代刚接触欧美流行音乐时的感受，并且以动画片的形式提供了当时中央音乐学院的教授们最感兴趣的是喜多郎等电子音乐等等信息。

这次我没有来得及调查这些所有的信息，而只能对于有限的刊物进行初步调查。把音乐信息带给中国的主要刊物有《中国电视报》《北京电视周刊》等提供电视节目信息的刊物，《SuperCity 北京》《TOCOTOCO》《CONCIERGE 北京》（还有上海版和大连版）等日文版免费中国信息刊物，《that's Beijing》等英文版中国信息刊物，还有流行音乐和摇滚乐的刊物《通俗歌曲》《我爱摇滚乐》《摩登天空》和《[V]Magazine》等。其中资料比较容易搜集的是《通俗歌曲》《我爱摇滚乐》《摩登天空》，本稿主要以《通俗歌曲》为考证的对象，从历史的角度进行分析。

· 进化着的摇滚专刊——《通俗歌曲》的历史

据我所知，《通俗歌曲》恐怕是最早把摇滚乐信息介绍给中国的刊物之一。这部刊物在中国国家图书馆没有收藏，我在北京的首都图书馆找到了比较完整的一套。最新几期可以在阅览室随便阅读，可是一年以前的已藏在书库中，所以先要用电脑检索之后，请服务员搜索出来。据电脑检索的结果，这里的《通俗歌曲》并不完整，目录上查得到 80 年代的几部合订本，但是不知怎么没能看到现货，我只看到了 90 年代的合订本。虽然如此，在这次阅览中，了解到了以下几点。

90 年代发行的《通俗歌曲》是月刊的小册子，几乎不象定期刊物，比如往年日本的《明星》杂志的副刊专门登载乐谱和歌词的那样，它尽量不登载散文、评论等文章，反之，版面几乎都被乐谱占据，而且那乐谱也不是五线谱，也不是吉他杂志采用的六线谱，而是中国的京剧伴奏用的“简谱”。

刊登的歌曲以中国的民歌和流行歌曲为中心，随着时代的变化，港台流行歌曲慢慢多起来，后来中国的摇滚乐和欧美的民乐、摇滚乐也被刊登。

到了 90 年代末，《通俗歌曲》有了转变，它变为摇滚乐的专刊了。版面也扩大成 B5，照片印刷质量提高，纸质也大大提高，成为一个像样的刊物了。之后到现在，它一直在封面上显示着"中国摇滚第一刊" 这引人注目的字样。新的《通俗歌曲》跟以前不同的是有关欧美和中国的摇滚乐乐队的信息以及音乐节和现场演出的信息成了刊物的主要内容。还有乐队成员的照片也登载了许多。可以说它加强了摇滚乐信息刊物的性格。它除了介绍走红乐队的名曲和歌词之外，还介绍了欧美摇滚历史上的古典性唱片和新乐队的新唱片。这些信息对于刚刚开始对摇滚乐感兴趣并自己也要组乐队的年轻人来说，是一个很好的参考书。

不过，不知为什么，以前占据首要位置的乐谱销声匿迹，把地位让给乐队信息。那或许是因为著作权的问题，也有可能是因为书店的音乐柜台已有很多书专门登载摇滚和流行歌曲乐谱。

没改刊名可能是因为他们顾虑公安部门还把摇滚乐当做取缔对象的情形。中国第一所摇滚学校"迷笛现代音乐学校"也从开始一直用"现代音乐"这词汇也据说是同样一个原因[香取义人：1999]。

把该刊 1999 年以后的封面进行比较，可以看出这部刊物的微妙的进化过程。1999 年之前，其封面标题只写着《通俗歌曲》，不过到了 1999 年前后一段时间里，该刊的内容有关摇滚乐的占多数。封面的照片主要也是摇滚乐的。只是封面上看不到"摇滚"、"ROCK"等字样而已。1999 年的 11 期有 Def Leppard 的专栏和"摇滚特刊"的字样，是唯一的例外。由此看得出，从这个时候起，公安似乎对于"摇滚乐"的防范放松了一点。从"摇滚特刊"开始，该刊标题，多了一条"中国摇滚第一刊"的副标题，同时还在标题后面若无其事地加了"ROCK"四个字母。这样，它慢慢地显示"摇滚乐"的色彩。

但我们从 2001 年至 2002 年的封面和标题可以看出，这个方向并不是一帆风顺的。比如，2001 年第 6 期至第 9 期的封面，除了有"通俗歌曲""ROCK""中国摇滚第一刊"之外，还加了"摇滚版"3 个字，但第 10 期上消失了"摇滚版"，却有更大的"ROCK"替代了它。反之，第 11 期的标题被放大退缩到封面的右下角，而《ROCK》和《中国摇滚第一刊》等字样都从封面上消失掉，只在上边有《ROCK POP》的七个字母显出了标题的姿态。到了第 12 期，又恢复了第 9 期以前的模样。过了年，2002 年第 1 期，虽然封面上边有《通俗歌曲》这标题，但《ROCK》和《中国摇滚第一刊》的字样却没有，而且比《通俗歌曲》还大的《POP》三个字母炫耀着自己的存在。第 2 期之后，这《POP》变为《ROCK》，在《通俗歌曲》下面也恢复了《中国摇滚第一刊》，而这个封面设计基本上继承到 2004 年。

从这个情况看得出，围绕介绍什么音乐的信息，或者"什么是摇滚?"等流行歌曲的定义等问题，编辑部里面存在着一些议论和对立，但后来"POPS"跟"ROCK"合而为一。

不过，其议论和对立酝酿出了一个方向。结果，在 2004 年的某一时期开始，"ROCK"变成两个汉字，被提升为刊物标题，换句话说，刊物名就改为《摇滚》，而且其下面用小字体加上副标题"通俗歌曲"和"中国摇滚第一刊"。可见，到此时"摇滚乐"已经在中国得到了认可。刊物却还保留"通俗歌曲"四个字，可能是因为商标已经登记了"通俗歌曲"这名字，而且不宜引起读者的混乱，所以没完全取消旧标题，把它做为副标题留下来了。实际上，在其后的一段时间，这个副标题恢复了大字样。

这时，该刊物改为半月刊，每月出两期。从需要和供应的原理讲，这件事反映着摇滚乐受欢迎的程度，同时也意味着摇滚乐迷的增多和摇滚乐迷趣味的多样化。为什么呢？因为《摇滚·通俗歌曲》半月刊化的情况并不简单。原来的摇滚版《通俗歌曲》继续着每个月发行一次，晚之半个月，还发行“非音乐”，有时另外发行电子吉他，键盘，鼓等乐器的专号，渐渐使之定期化。在这里看得出，中国出现了好多年轻人，对于摇滚乐及其乐器和演奏法怀着很高的兴趣，并且针对着那些未来的摇滚乐新秀，很多电吉他，混音器等的制造厂和进口商还有一些音乐学校进行宣传活动，因此《通俗歌曲》这样的刊物成为他们宣传活动的舞台，给刊物提供一定的出版资金。可以说，这是摇滚乐产业化的一个过程。

· 《通俗歌曲》90年代的成就

下面我要讨论《通俗歌曲》介绍外国摇滚乐的情况。

90年代的《通俗歌曲》原来以介绍民间通俗歌曲尤其是流行歌曲为主。当时受到中学生欢迎的台湾作家三毛自杀了，《通俗歌曲》就在1991年6月设置了《三毛专栏》登载了她所编词的《我爱橄榄树》《滚滚红尘》《飞》等歌曲的乐谱。这意味着这种刊物也要注意热门话题引起读者的注目。

所以请注意，下面讲述的内容不是这部杂志的主流，而是专从摇滚乐来讲述的特殊情况。

1992年第5期介绍了朱哲琴（达达娃）的“新专辑”《黄孩子》。这是该刊物“音乐茶座”专栏中的文章。这《黄孩子》是由上海音乐学院的教授何训田，何训友编制，艺术性很高的一张专辑。这里能看得出，该刊物的编辑态度不仅对当时音乐界的流行动向，还对音乐作品和音乐人的艺术追求也很重视。

1992年11期登载中国的摇滚乐队黑豹的《无地自容》的乐谱就是针对着话题性的。当时黑豹乐队刚刚出第一张专辑，正是这个时候，黑豹乐队的元主唱窦唯脱离了乐队，结果另一个主打歌《脸谱》有两种版本，一种是由窦唯演唱的专辑版，另一种是由键盘手栾树演唱收进《摇滚北京》的版本。

1993年第4期，《音乐茶座》专栏登载了一篇文章，题目叫做《飞·从唐朝看中国摇滚》。唐朝是中国早期两大摇滚乐队之一。92年介绍黑豹只登了乐谱，反之，介绍唐朝乐队，除了登载他们的《梦回唐朝》和《太阳》的乐谱之外，还通过《音乐茶座》介绍实力派乐队的文章，颂扬中国摇滚的蓬勃发展。

可以说，这里反映着正在发展着的中国摇滚乐的情形。

这1期还登载一篇很重要的文章。那是达信所写的《火红的年代——60年代英美流行歌坛史话》的第4回连载，介绍的是披头士。当然中国国内介绍披头士有比它更早的。比如说，刘索拉1986年发表的短篇小说《蓝天碧海》的开头，引用了Let It Be的歌词，也提示Beatles的名字。但那与其说是介绍，不如说是表示崇拜或者尊敬的心情。据我看，作为客观的介绍就要举这篇达信写的文章是比较早的一篇吧。可能还有一些8、90年代香港的信息刊物所登载的文章，但对于中国大陆听众的影响力是有限的。顺便讲，《通俗歌曲》所介绍的最早的披头士歌谱，是在1995年第2期登载的《Yesterday》。

到了1993年，第6期刊登了张楚的《姐姐》和ADO乐队的《我不能随便说》的乐谱。这两个曲子是台湾的魔岩文化唱片公司出的中国摇滚乐队合辑《中国火》的第一个和第二个歌曲。我认为这个乐谱的登载是唱片公司为了唱片的宣传给刊物提供资料来实现的。在中国流行音乐产业形成的

过程中，台湾音乐界所起到的作用，也在这样的方面看得出其一端。

其后，94年第10期，登载郑钧的《回到拉萨》《赤裸裸》《极乐世界》，95年第2期登载丁薇的《断翅的蝴蝶》和披头士的《Yesterday》的乐谱。95年第9期虽然没有登载乐谱，但在“歌迷天坛”栏目，介绍了那年因交通事故死去的唐朝乐队贝司手张炬和《断翅的蝴蝶》的歌星丁薇。丁薇是上海音乐学院毕业的自作自唱歌手。她的爵士色彩浓厚的歌唱被当时音乐界有所期待。但她的第一张专辑没有得到所期待的收获。她真正红于中国乐坛是3年后出第2张专辑《开始》以后的事。那么，《通俗歌曲》在这个阶段介绍丁薇可以说是先见之明吧。

后来，96年第2期登载《摇滚一族·摇滚 Party 再热京城》介绍北京摇滚乐的情况，并登载臧天朔的名作《朋友》的乐谱。96年第3期登载了窦唯个人专辑里的一曲《艳阳天》的乐谱。第4期登载了两个引人注目的信息。一个是介绍摇滚皇后罗琦的题目叫《罗琦·失眼的滋味》的文章。另一个是《黑豹前主唱栾树状告 JVC》。栾树是黑豹乐队的元键盘手，而且也是黑豹录制第2张专辑时的主唱。但他录制《黑豹 II》之后忽然脱离乐队，在日本出售《黑豹 II》时，乐队成员已经变了，JVC就把主唱写成秦勇，键盘手写成冯小波，其实专辑里演唱演奏的主要还是栾树，但他的名字在唱片上一字不提，所以栾树就去打官司。

我在北京首都图书馆调查到的《通俗歌曲》90年代所介绍的有关摇滚乐的情况大约如此。就介绍文章和乐谱的登载而言只能说并不多。刊物本身的主要内容还是流行性民间歌曲。但是通过这次的调查，我确认该刊物对于中国摇滚乐的主要乐队和专辑的信息，是介绍得比较妥善。但对于外国的摇滚乐信息，还未能做到有系统的、详细的介绍。

要弄清《通俗歌曲》90年代末起，变成摇滚乐专刊的原因，还要考察90年代以前和以后的读者的变化等许多问题。但就按照这次调查的结果而言，《通俗歌曲》90年代介绍摇滚乐的活动是紧跟中国摇滚音乐界的发展有密切联系的。要适应其需要的话，需要脱离一些老的读者群，追求获得新的年轻的更大的读者群。如果要这样，《通俗歌曲》必须大大改装，变成一部摇滚乐的专刊。

· 作为摇滚乐专刊的《通俗歌曲》——90年代末到2000年代

《通俗歌曲》98年99年之间改变体制，成为摇滚乐专刊了。改革的早期，刊物封面主要采用的是陈底里等中国的摇滚乐手的形象，但内容方面也有一些海外乐队的介绍（例如 YES、Def Leppard 等）。但到了2000年，封面采用海外音乐人的形象忽然多起来（比如第7期的麦丹娜）。关于信息方面来说，第5期有 Moby、Björk、Limp Bizkit，第6期有 Kurt Coban、Smashing Pumpkins、Everything But the Girl，第7期有 Metallica、Kid Rock、Korn，第9期有 Diamanda Galas，第11期有 Skid Row、Pantera 的 Phil Anselmo、Limp Bizkit 的 Fred Durst，第12期有 Eminem 的信息。看得出，到了2000年，增多了欧美音乐人和乐队的信息。这里包括摇滚名人和刚出来的年轻乐手，其介绍显得太杂，缺乏系统性。

或许是2000年的反动，2001年的封面又有中国音乐人居多了。比如说，第1期封面是崔健的照片，文章也有《解剖崔健》的专论。第5期封面是痛苦的信仰乐队，第6期是姜昕，第12期是左小诅咒等。其实信息方面也有 Radiohead、Cold Play 的文章，并不排除欧美摇滚。第2期，封面是一个西洋美女，但信息除了唐朝、黑豹、许巍等中国摇滚老手以外，还有介绍南宁地下音乐界的文章和有关英国的老乐队 Led Zeppelin 的文章，可以说是介绍大摇滚家的一期。另外，第5期是 Rap and Metal 专号，第6期是 Women Rock 专号，第8期是“打口岁月”专题，第12期是“酒吧文化”专

题，而这些专题是了解中国摇滚乐历史时提供重要的资料。

总之，成为摇滚专刊以后，一直追求海外海内的摇滚乐的重要动向的这个刊物，是在 2001 年需要停止其步骤，回故中国摇滚乐的 8、90 年代，并回想海外摇滚界的 5、6、7、80 年代，把这些信息有系统的介绍给中国读者，让他们重新认识摇滚乐，让他们重新评价摇滚乐。我在这里看出，这个刊物在这一年才萌芽出来了做为一个摇滚乐专刊的自觉。

通过这个过程《通俗歌曲》才能成为专门介绍摇滚乐最新信息的刊物了。所以到了 2002 年，封面就多起中国摇滚乐的红乐手来。比如，第 3 期封面是郑钧，第 4 期是张楚，第 5 期是朴树，第 6 期是丁薇，第 9 期是朱哲琴等等，尤其引人注目的是第 8 期的舌头乐队，这样的朋克乐队成为刊物封面以前是少有的事。第 12 期的封面是 John Lennon，可以说是这一年的例外，但另一种例外要举第 7 期和第 10 期的封面。

第 7 期的封面是 2002 年度《迷笛现代音乐节》的写真照。《迷笛现代音乐节》是中国第一所专门教学摇滚乐的学校迷笛现代音乐学校从 1999 年起每年一次举办的音乐节。这个音乐界到 2003 年为止就在学校的校园里举办，后来随着规模的扩大和聘请校外乐手等情况，开办的目的与方法有所改变，2004 年就在校外的国际雕塑公园开 4 天，2005 年以后，不免费了。

第 10 期的封面是《丽江雪山音乐节》的写照。这个音乐节是 2002 年是第一次开，有崔健，唐朝，朱哲琴等中国摇滚乐的先驱乐手参加的比较多，所以网上普遍成为了话题。

看这些音乐节的纪录让我想起 1969 年在美国举办的传奇性音乐节《Woodstock》或者 1970 年在英国举办的《The Isle of Wight Music Festival 1970》。所以我估计中国的这些大型音乐节的意义对于中国的摇滚迷群众来说和我们所向往的《Woodstock》和《Isle of Wight》一样大吧。因为他们的音乐节是由公安部门包围监视之下进行，所以他们是不会像参加 Woodstock 的年轻人们那样随心所欲。虽然是这样，在经历过两次天安门事件的中国，每年能召开这么盛大的音乐节，而且其信息在网络上可以读到，又发表在刊物上，是一件让人惊异的事情。

其实，《通俗歌曲》取材于巨型音乐节并不是偶然的。大约从这个时候起，有些政府部门和有关企业认识到音乐节的经济效益。2002 年的《丽江雪山音乐节》就是一种象征性的节目。因为主办单位是丽江的一个旅游公司，加上一些网络公司和有关音乐的企业，广播媒介，电视台等支持合办。但最重要的是全国各地来参加音乐节的年轻群众支持音乐节进行消费活动。可见，这些音乐节是合乎经济规律的。

我自己也目击过一件事。记得那就是 2002 或者是 2003 年的上海旅游节，是上海市政府在南京路步行街的一部分划出了一片地方设置了舞台，开办一个音乐节。票价是 100 元，但我去买时已经卖完了。幸亏我朋友认识主办单位的人，他让我们进去。演出的主要是上海的音乐组合，但最后的演出，他们聘请中国摇滚乐之父崔健。

日本鼓手凡奇·末吉在他的《中国大陆摇滚乐流浪记》当中所指出的那样，过去总要对摇滚乐进行抵制的中国政府机关，为了发扬中国人民的经济活动，到此阶段居然利用起摇滚乐来了。

.《通俗歌曲》的价格

《通俗歌曲》在 1999 年左右的价格大约是每期 6.60 元，2001 年涨为每期 7.80 元，2002 年 9 月忽然涨为 13.80 元。涨价的原因主要在附送音乐光碟。1999 年创刊的《我爱摇滚乐》杂志，一开始就带音乐磁带或光碟，以“有声音乐杂志”引起注意。还有很多刊物也附带光碟。为了对待这些

情况,《通俗歌曲》也采用这个方法,参加销售的竞争。

对于新乐手和新乐队来说,自己的作品能不能收进这附送光碟与否,与自己作为音乐人的成功有直接的关系。那刊物的存在对于梦见将来的歌星的年轻人来说,越来越重要。并且对已出点名的乐队来说也是个很好的宣传媒介。

结语

总而言之,通俗歌曲本来是以介绍民间的流行歌曲为主要目的的刊物,但是为了配合读者提供他们摇滚乐信息的需要,渐渐改变方向,最后成为摇滚乐专刊,提供了越来越多的摇滚乐信息。后来又按照读者要求的多样化,将刊物分为吉他版,非音乐版等等。通俗歌曲的这种进化,似乎反映中国有无数的摇滚乐迷正在吸收刊物所提供的信息,梦想将来成为摇滚乐明星。这个刊物的意义也似乎在这里。

文献・资料

- 雪季(1993)『摇滚 梦寻 — 中国 摇滚 楽実録』中国電影出版社
橋爪大三郎(1994)『崔健 — 激動中国のスーパーstar』岩波ブックレット No.359
ファンキー末吉(1998)『大陸ロック漂流記』アミューズブックス
香取義人(1999)中国摇滚データベース <http://www.yaogun.com/>
汪経芳(1999)『20 世紀最後の浪漫 — 北京自由藝術家生活実録』北方文藝出版社
于今(1999)『狂歡季節 — 流行音楽世紀く颶風』广东 人民出版社
顔峻(2001)『内心的噪音』外文出版社
顔峻(2002)『地下 — 新音楽潜行記』文化藝術出版社
陸凌涛 李洋(2003)『呐喊 — 為了中国曾經的搖滾』廣西師範大学出版社
顔峻(2003)『燃燒的噪音』江蘇人民出版社
朱大可・張閔(2005)高屋亜紀・千田大介監訳『Chinese Culture Review 中国文化総覧』Vo.1~2 好文出版
青野繁治(2006)『中国ロック音楽と行政』『現代中国』80号
青野繁治(2008)『中国大陸摇滚楽界 20 年の概観』東華大学シンポジウムサマリー集

进化着的摇滚专刊《通俗歌曲》：将摇滚乐介绍给中国的刊物

青野繁治

“Tongsu Gequ” The Evolutive Rock Magazine that Introduced Rock Music into China

AONO Shigeharu

摘 要

中国已有几部有关流行音乐的刊物，其中包括专门介绍摇滚乐的《通俗歌曲》、《我爱摇滚乐》、《摩登天空》等。

本文要根据关于《通俗歌曲》的初步调查，了解中国刊物介绍欧美摇滚乐的情况，并将该刊物在 20 世纪末到 21 世纪初所作出的贡献弄清楚。

第一章，主要描述《通俗歌曲》的历史，指出《通俗歌曲》在 1990 年代末所发生的变化，并考察其封面标题所显示出的问题。《通俗歌曲》在 90 年代是主要刊登流行歌曲乐谱的刊物，但它在 90 年代末发生了巨大的变化，以后不太刊登乐谱，而主要刊登欧美摇滚信息的刊物了。其变化主要表现在封面的标题及其副标题上。90 年代末，标题《通俗歌曲》后面加了一条“中国摇滚第一刊”的副标题。有时候，还加了另外一个大标题《摇滚》几乎要压倒《通俗歌曲》，却有时候又恢复大标题《通俗歌曲》等等。这里能看得出《通俗歌曲》编辑部在读者群众的要求和政治上的制约之间有所分歧和动摇的情况。

第二章，主要描述《通俗歌曲》在 1990 年代的情况，指出该刊物当时主要是刊登流行歌曲乐谱的刊物。乐谱主要是中国国内所流行的歌曲，但有时候还刊登中国早期摇滚乐的乐谱和文章。那时介绍欧美摇滚乐的文章有是有，但还不多。该刊物最早介绍欧美摇滚乐的是披头士，刊登的乐谱是《昨天》。

第三章，主要描述《通俗歌曲》变成“中国摇滚第一刊”之后的情况。这里主要根据该刊物在封面所采用的乐队和标题下所提示的专题，讨论 2000 年代介绍中国和欧美摇滚乐的情况。这里主要描述了《通俗歌曲》反映着 2000 年代摇滚乐有广大的听众，能召开音乐节，但有一部分摇滚乐被中国政府认可并为政治服务等情况。

第四章，主要描述《通俗歌曲》的价格和流通形式，作为结语。

(担当委员：田中 仁*)

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>

* 大阪大学大学院法学研究科・教授